

開館 20 周年記念特別号

萩原朔太郎記念
水と緑と詩のまち

前橋文学館報

No.39 2013.12



開館20周年記念特別企画記念講演

「私が体験した忘れられない前橋のこと」

萩原 朔美

平成二十五年九月七日に開催された開館20周年記念特別企画で、萩原朔美氏による講演が行われました。

先ほど館長から紹介していただいたんですけど、一つの都市の中でこんなに多くの詩碑が建っているところは日本全国ありません。常軌を逸している多さだね、こは。みんなびっくりするんだから。ここの周りを歩いただけでもいくつもあるじゃないですか。前に（鈴木）志郎康さんと二人で、志郎康さんが「僕のどこかにあるんだ」って言うから、教えていただいたら、朔太郎通りっていうところで。俺のがこんなところにあるよって笑っていました。そのぐらいあらゆるところにあるんです。で、言葉と出会えるんです。そんなところ無いですよ。

世田谷区って詩碑あるのかな？ でも、僕も初めて知ったんですけど、下北沢を散歩していたら、遊歩道があるんですけど、そのところに大きなプレートがあつて、「朔太郎・葉子の鉄塔」って書いてあるんです。なんだこれと思ったたら、

世田谷で暮らしていたところに、送電線があるんです、代田に送電線の鉄塔が。そのことについて朔太郎と萩原葉子がいっているんですよ。その記念なんです。鉄塔ですよ。（笑）どこにでもありますよ、鉄塔なんか。それを記念してですよ。びっくりしちゃうって。そのぐらい無いんです。

世田谷って文化人いっぱいいるんですよ。世田谷文学館へ行けばおわかりになると思いますが、小説家や詩人なんて掃いて捨てるほどいる。だけどそういうものってほとんど無くて、国木田独歩の碑を建てるって言うって、伊藤文学さんという人が、一所懸命やっていましたよ。それで十何年かかってどこかに作ったって言うって言っていました、自慢げに。そのぐらいですもんね。

どうしてこんなに作ったんでしょうね、前橋は。あらゆる詩の碑がいっぱいある。僕が小学校の一年だか忘れちゃったけ

ど、生まれて初めて前橋に来て何をやったかというところ、私の仕事は敷島公園の中にある朔太郎の詩碑の除幕式の幕引き係だったんです。なんだかわからないけど、引いてくれって言われて引いたら、あの碑があらわれて、それが人生の始まりの幕引きみたいな。(笑) 私のそのことが、ここから幕が上がったみたいな感じに記憶しているんですね。それで写真で見ると確かに。バラのある公園、敷島公園の、僕の記憶では、昔とはもうちよつと場所が変わったと思うんですが。(観客より「違いました」) 違ってますか、やっぱり。移築したんですね。もっと真ん中にあったような気がしたんですね。それが自分では、小学生でしたから意味はわからなかったんですけれど。

それから前橋に来るたびに酔っぱらった詩人と出会うんですね。あるイベントのときにみんなが集まって、昼間の講演というのは子供だからわからないんですね、何言っているんだろっという感じで。で、僕が唯一覚えてるのは、日本文学のDonald・キーンさんが、朔太郎の詩についての講演をやったんですね。そのときに「竹、竹、竹」っていうのを英語でやりますとかって言って「バンブー」って言ったならば、会場が笑ったんですよ。それが何でおかしいんだろっという意味がわからなかったんですね、英語に翻訳するとおかしいんだろっとなつて、ちよつと理解できなくて。そのDonald・キーンさん、日本文学の外人が、アメリカ人ですかあの人は、外人が日本文学のことを研究しているんだっということだけをおぼろげに理解しました。



萩原 朔美 (はぎわら さくみ)

1946年11月14日東京生まれ。映像作家、演出家、エッセイスト。多摩美術大学教授。母は小説家萩原葉子、母方の祖父は萩原朔太郎。寺山修司主宰の「演劇実験室・天井桟敷」に在籍し、俳優・演出家として活動の後、映像作品の制作に取り組み、時間や記憶をテーマにした作品を制作。舞台作品の演出のほか、エッセイ集等も多数。

その後いろいろな方の講演を聞いたんですが全然残っていないですね。イメージが。ただし、自分の文章に何回も書いたので読んだ方には申し訳ないのですが、もう一回話させていただきますけど、一人は草野心平さんで、第95回全国高等学校野球選手権記念大会で優勝した前橋育英高校の校歌を書かれていますけど、この間NHKで校歌が出てきて、おお、草野さんだつて、ちよつと感動しましたけれど。その草野心平さんが酔っぱらって、裸になつて、僕は小学生でしたけど、背中にな、トクホン、膏藥を貼れって言われて。浴衣をもろ肌脱いで、子供の手でもってトクホンを貼ったんですね。でも、その印象がすごく鮮明で、大人のものすごく大きな体の人の背中に貼ったっていうのが印象に残っています。それは何故決定的に記憶に残ったかというところ、その後小学校の何年生だか忘れちゃったけど、学校の詩の時間か何かで草野心平の詩があつて、それに蛙の詩とかなんとかが出てきて、そ

それが僕にとって見たらものすごく面白い詩だったんです。あ
あ、草野心平ってあんな酔っぱらったでかいおじさんがこん
な詩を書くんだって、そのギャップが面白くて。それで小学
校五年だか六年のときに好きな詩を一編ずつ朗読するってい
う課題を与えられて、僕はそのときこれは草野心平の詩にし
ようと思つて調べたら、四行の詩で「風。 風。 風。 風。」

風。／／天の。／こややく。（たこ）」って書いてあるんで
すよ。笑っちゃって、「天の。／こややく。」って言われれば
そうだろうなと思って、じゃあこれにしようって。ところが
僕を教師も朔太郎の孫って知っているわけですよ。だから
ついに私の番になって、みんなが「おい詩人の孫だからな
んかすごい詩をやるだろう」って。（笑）それで僕が「風。
風。／ 風。 風。／／天の。／こややく。」で終わったら
先生はあきれて、教室は失望の空気で、何か悪いことしたなっ
て。その失望の空気で「風。 風。／ 風。 風。／／天の。
／こややく。」だけは忘れられないんですね。あそこでもっと
格好いい詩を言っておけばよかったんですけど。でも僕にとつ
てみれば「風。 風。／ 風。 風。／／天の。／こややく。」
が好きだったんですね。

その後草野心平の詩っていうのをずいぶん読ませていただ
いて、まあ詩をあまり理解しないんですけど、僕は駄目なやつ
でね。朔太郎の詩なんかほとんどわかりませんという感じで。
駄目なんですよね。何でこれがいいっていうのがよくわから
ないんですけど。友達に詩人が多いんですけどわかりませ
んね。今度の朔太郎賞は建畠（哲）さんなんです。建畠
造の息子で、僕も多摩美（術大学）で同僚だったんですよ、
十五年間ぐらい。建畠さん取ったよと思って、『死語のレッ

ス』という詩集なんですけど、送られてきてた。でも全然わ
からないやと思って。ただ、今読むと、日本語の死語ってい
うものに対して、その中に言語の非常に重要な核が潜んでい
るのではないかっていうのだと思うんです。多分私の少ない
感覚で読ませていただければ。うまいんですよ、あの人、詩
人でもないのにね。あ、詩人かもわからないです。どこかの
女子大の学長なんかやりやがって、ずうずうしい男なんです
よ。今は埼玉県立近代美術館の館長さん。次々と館長やるん
ですよ、二年間ぐらい。いい仕事ですよ。埼玉県立近代美
術館で、「日本の70年代 1968-1986」で僕の作品も展示さ
れたんですけど、彼が館長だと思いながら、これは館長室で
おどかしてやろうと思つて行ったら留守だったんですけど。
国立国際美術館の館長とかね、館長だらけなんです。それ
が詩を書いているからね。今度ここに来て記念講演をやりま
すから、さんざん言ってください。詩人とは思えないとかい
ろいろ。（笑）萩原が言っていたって。谷川俊太郎さんなん
かも第一回の萩原朔太郎賞の受賞者ですけどね、朔太郎より
も朔美君の方をよく知っているとかがって挨拶したらしいです
けど。

もう一人は、三好達治さんなんですけれど、三好達治さん
はほとんど酔っぱらっている姿しかわからないですね。でも
後で物心ついてから詩を読んだら、えっ、ていうくらい繊細
じゃないですか。あんなにガラの悪い男がこんな繊細な詩を
よく書くなと思って、本当にびっくりしましたね。実は僕は
三好さんの方が詩は好きなんです。自分に合ってる、どうも。
それでおふくろの小説を読んだら、萩原朔太郎と三好達治が
出会ったのを、おふくろは「世紀の出会い」だって書いてむ

ちやくちや怒られたって書いてあるじゃないですか（『天上の花』『叱責』）。そりゃあそうだよ。『世紀の出会い』なんてプロレスラーじゃあるまいしね、ボクサーの試合じゃないんだって。そういう言葉を使っちゃいけないとかって、ものすごく怒ったって書いてあって、ああなるほどな、さすがに詩人はそういう言葉に対しての思いが強いんだなって。それで僕も生徒にまるで自分の言葉のように言うんですけど、文章で「花々」って書いていけませんとか。本当は三好達治が言っているんですよ。「山々」って書いていけません、とか。それは三好さんの文章を読んだらなるほどと思って、まるで自分の言葉のように言ってますけど、本当に「花々」じゃだめですよ。『花々』って書いたって何を思い浮かべるんですか？ チューリップを思い浮かべる人もいるし、桜かもしれないし、バラかもしれないし、「バラ」って書いてあるのと「チューリップ」って書いてあるのでは全然違うこと書いているのと同じじゃないですか。それじゃ駄目ですよ。『山々』なんてとんでもないですよ。「山々は美しい」、何言っているんですか？ 富士山と浅間山と高尾山とでは全然違うじゃないですか。違う意味になっちゃう。そういうことなんだって思ってます。だから後で全部わかる、次々と。子供のころ、あまりいたしたこと言っても影響ないかもしれないけど、でも出会ったっていう体験の後に、私が出会ったあの酔っぱらいってこんなことっていうのが面白いんですよ。

もう一人の酔っぱらいなんて本当に迷惑な人でした。山岸外史っていう『人間太宰治』を書いた人ですけど、山岸外史が酔っぱらって家に来なければ、うちのおふくろは小説を書かなかったんですよ。あの人が酔っぱらってうちに来て、

酒出せとか言ってる。僕が小学校のころって大人が来ると怖いんですよ。何か知らないけど大きな男が、汚い身なりのやつがうちに来て酒出せとか言ってる、それで酔っぱらうわけじゃないですか。言っていることがよくわからないですもんね、何言っているんだか。それで庭の昆虫を食べたりするんです、いきなり。僕は後でかなり経ってから古本屋で『人間太宰治』を読んだんです。そうしたら文章上手いんですよ、あの酔っぱらいが。ええつ、こんなこと書くんだって。しかもそれは太宰につながるものすごい人なんです、あの人はね。そういう人なんで、それもちよつと驚きでした。

それから前橋で出会った人でいえば、西脇順三郎っていう人もちよつと驚きでした。僕にとつてみれば。それは、『Andarvalia』でした。教科書に詩が載っていて、「少年は小川でドルフィンをつまへて笑った。」って、何格好いいことを言っているんだって。そういうのを読んでいて、格好いい詩だねって。ギリシャ的抒情とか、知らないですよ、そんなもの。何的抒情でもどうでもいいんだけど、すごく乾いた、素敵なインテリジェンスのあふれる詩だなあと思っていたんですよ。そうしたらこの前橋で酔っぱらいの話を、僕は二つだけどうしても忘れられないんですけど。朔太郎の「広瀬川」っていう詩の最後のフレーズがね、これが詩なんだって言うんですよ、繰り返す。周りの大人はそれに対して何の反応もしないんですよ。そのころはもう十代後半ですから多少はわかります。それはユーモアだって。「ちひさき魚は眼にもとまらず。」当たり前ですよ。小さい魚は目にもとまらないのは当然じゃないですか。目にもとまらないよ、小さいんだから。それを西脇順三郎が延々とこれが詩、これがユーモア

だと。「すみません、どこがユーモアなんですか」って本当に聞きたいくらいだったんですけど。「ちひさき魚は眼にもとまらず。」これがユーモアだって。でまあそれは納得します、わかりました。小さい魚は目にもとまらずパーッと動いている。これはユーモアです、はいわかりました、これはユーモアです。小さい魚は目にもとまるって書いてないじゃないんですね。

もう一つは、「だから結局ね、遠いものは連結するんだ」って言うんですよ。酔っぱらっているから何回も言うわけです。で、ついに覚えちゃったんです。「遠いものは連結する」。それで記憶としてはずうっと残っていて「遠いものは連結する」っていうのがある日ふとぼーんと出てきて、そういうば西脇順三郎は酔っぱらって「遠いものは連結する」って言ったなあ。

それで今、さも自分の言葉のように学生に言いますが、「言葉はね、近い言葉と近い言葉を合わせちゃ駄目なんだよ。アメリカはコカコーラって書いて書いちゃ駄目なんだよ。アメリカとコカコーラは近いだろ。だから駄目なんだよ」とか言つて。「遠いものだよ。アメリカに一番遠いもの」。答えが出ないんですよ、なんだろうつて。でも出ないのは「それは君らが考えろ」とか言つてね、ごまかすわけです。教師つてすぐ人に振るんです。「俺が考えることじゃない、君らが考えること。アメリカに一番遠いものは？」はい、順番に」とか言つて。その間に答えを考えている。アメリカに一番遠いものはなんだろうつて。俺の方が絶対すごいことを言うよ、アメリカより一番遠いもの、これが詩なんだよとか、最後に言つてやるつもりなんです。予想もしないカゴメトマトジュースとか違うこと言つてね、アメリカつて言つたとき絶対思い浮かばないもの、

コクヨの…、サンダルとかね、何か違うことを言つてやつて、湧水とか言つてやつて、アメリカの湧水、違うか。でもそうすると詩になるつていう話ですね。そのことを言いたいんだろ



うと思いましたが。それはやつぱり手術台の上のなんだろう、蝙蝠傘？　すごく遠いもの、一番遠いもの同士つていうのがくつつくかという話で、それは後でなるほどなつて思つたんです。だから日常的には僕らはそういう遠いものつていうのは言葉に対して連結するものとは思つていないつていうところがね、決定的なことなんじゃないかなと思ひましたね。

そういう前橋体験というのは、人との出会い、内容はわからないけど人との出会いで、その人たちは今から考えればみ

んな自由にやっているんですよ。酔っぱらって、酒飲んで、勝手言って、しゃべることは自分のことだけ。人のことの氣遣いを知りません。自分のことだけ。そのぐらいいいつも自分が今このことを考えているんだっていうことを多分言いたかったんですね。言いたいんでしょね。それは少年のようなんですよ。考えてみれば、泰然とした、悟りきつたような感じの人は一人もいない。いつも少年のようにわんわん自分の言いたいことをしゃべり続けるっていうね。全部がそういう人なんだっていうことがつくづくわかりましたね。で、そういう人ってなかなかいないんですよ。七十、八十の方で少年のよう人ってなかなか出会えない。みんなお説教をされるっていう感じですね。私もあと三年で七十なんですけど、およそね、悟れないんですよ。自分が何が出来るか未だにわからないですね。だから未だに迷っていて、俺って何が出来るんだろうっていうのを、今でも悩んでるんです。

ふと子供のころのことを考えれば、あの大詩人たちっていうのはあんなに少年のように自由でいられるっていうことは、何か表現に向かえば自由になるのかなっていう気がします。表現に向かわなければどんな年を取ってしまっていく切迫感があると、じゃあ七十になったら、表現だけで生きようというように、今思っているんですよ。自分は才能はないけど何かいけるんじゃないか。映像作品は今後も同じように作りますけど、本も書くでしょうけど、何か映像でも本でもなんでもないんですよ。何だろうか、俺には何が出来るんだろうかと思つて、最近役者でいけないかなって。(笑)

僕ね、美輪明宏さんが一番最初の共演者なんですよね。二十一かな。あの人がお母さんで、僕は息子役で出たんです

けど、あの人が最初の共演者だと思うとぞっとするんだけど、初めからなんていうか上手いんですよ。初日にもう立てるんですよ。半立ち稽古つて台本を持ちながら立稽古やつたりするんですけど、あの方は初めから立稽古が出来るんです。初日から全部覚えて、成りきっちゃっている。成りきっちゃっているから、なんていうんですかね、もう役の人の、隣の人は。で、僕は外で台本読んで覚える。美輪さんにはそういう段階はないです。もう仕上がりつつやっています。毎日演技している人って楽ですよ。役柄替えればいだけだから。あの人毎日演技しているから。演技を勉強する必要がない。日常が演技だから。楽ですよ。

この間見に行ったんですよ。たまには楽屋に顔を出してご機嫌伺いしようかなと思つて行つたんですよ。そしたらカーテンコールで、八十近い人が、こんな胸開けたドレス着て、相手役の若い男性と、カーテンコールですよ。舞台が終わつたのになかなか開かないんですよ。何をやっているのかと思つたら着替えて、舞台の上はこんな八百屋舞台なんです。八百屋っていうのは客席に対して斜めになっている舞台なんですけど、でかい八百屋でそのところで延々と踊るんです。客席はワーツで。美輪教だから。(笑) 美輪さんすごいんですよ。二十分ぐらいやっているの。しかもハイヒールで。それでラストシーンが乞食の役なんです。婆さんの。すごいなと思つて聞いたら、「何言ってるのあなた、最後は私のドレス姿を見に来ているのよ」って。「ああそうですか」って、反論出来なかった。「やつぱりな」とか言つちゃって。怖いから。

むちゃくちゃ怖いんですよ。ここだけの話として普通にしゃ

べっちゃいますけど、三年くらい前に寺山修司の「毛皮のマリー」をやったんですよ。本番中に美輪さん倒れたんですよ、自分のドレスを踏んで。自分が悪いんですよ、長いドレスだから。そうしたら複雑骨折して、ぼろぼろになっちゃったらしいです。それで医者に行つてレントゲンを撮ったら、もうくっつかないっていう状況で、そうしたら楽屋に帰つてきて美輪さんがむちゃくちゃ怒っているの。「ヘンリック」とか言つて、「ヘンリック。九條さん。」て、九條さんは前の奥さんで、ヘンリックは今テラヤマヘンリックって言つて寺山さんの弟になつていらっしゃるんですけど、呼びつけて、「あんたたちね、修ちゃん、修ちゃんは寺山修司さん、修ちゃんのお父さんのお墓に行つてないでしょ」とか怒っちゃつて。「修ちゃんのお父さんが怒つて私が怪我したわよ」つて、烈火のごとく怒つて。「何とかしなさい」とか言つて。それでしようがないからヘンリックが青森に行つて、お墓を探して。寺山さんのお父さんのお墓は、戦病死ですから戦地で亡くなっているわけで、骨なんか無いんですよ。当時ですから。紙切れ一つですよ。それでお墓をなんとかしなさいと言われたつて、なんとか出来なかつたわけですよ、日本国中ね。それでも怒られるから、そのお墓に行つて、もう一回その辺の土が何か入れて、新しいお墓を作つて、お坊さんをお参りしてお参りして、美輪さんに「こういうことでちゃんとお参りしたのでよろしくお願いします」つて。「しようがないわね」とか言つて。で、「怪我はどうするんですか？」つて言ったら、「こんなものは気で治すわよ」とか言つて、医者にも行かずにそのまま本番続けちゃったんですよ。信じられませんが、あの人。そういうことはあり得るんですかね。それをヘンリックとあるイベントでしゃべったんで

す、美輪さんすごいよねつて。

そうしたらもう一個、もう一個どころじゃなくいっぱいあるんですけど、長谷川初範君と美輪さんのことをしゃべったんですね、あるイベントで。長谷川君は美輪さんと公演をやっているんですよ、いっぱい。で、「朔美さん、俺もつとひどいことあったよ」つて言うの。で、「何があったんだよ」つて言ったら、本番中に美輪さんとセリフのやり取りをしていたら、いきなり美輪さんが後ろを振り返つて、「あんたそんなところに立つんじゃないわよ」つて怒っているんですよ、後ろに向かつて。何もないところに向かつて。なんなんだろうと思つたんだけど、長谷川君も本番中だからどうしたらいいものかわからなくて、はははとか笑っていたんだけど、どうしようもなくて。やつと台詞が再開したんですが、心配になっちゃつて、自分の演技が駄目だったのかなと思つて、終わつてから楽屋に行つて美輪さんに、「すみません、さっきのあれは何だったんですか。僕が悪かったんですか」つて言ったら、「違ふのよ、そのお芝居の」、なんていうお芝居が忘れましかつて、「なんとかつていう人の霊が出てきたから、あなたこれ本番だからここに出るのやめなさい」つて叱りつけたつて。(笑) そんなこと言われても困るよね。私もいろいろな人に会つたけど、あの人ぐらい霊の話が好きな人はいないですよ。それは自由つて言えば自由なんですけど。

それで「毛皮のマリー」の楽屋に行ったときに、「昔は面白かつたわよね、朔ちゃんさあ」つて言つて、「森茉莉さんね、あんたのお母さんの友達の森茉莉さんという人いたじゃない」とか言つて、美輪さん、一度だけ森茉莉さんのお芝居やったんですよ。えーと、なんとかの寝床。(観客から「枯葉の寝床」

そう「枯葉の寢床」。知っている人ばかりで、実はハラハラしているの。文学館に呼ばれるたびに、みんながタイトルとか知っているだろうから、名前も後でチェックされるよ、こいつ何言っているんだよ、それは森鷗外じゃないよとかね。(笑) で、そう「枯葉の寢床」を美輪さんがやったんですよ。そうしたら茉莉さんが怒っちゃって、自分のイメージではアランドロンだからそれ以外駄目だとか言っちゃって。だってさあ、アランドロンなんか無理ですよ、日本では。さすがの美輪さんもね、それには、茉莉さんには怒れなかったね。本当はそんなこと言われたって無理だって美輪さんは怒っているんだけど。でも今では笑い話でね、「森茉莉さんは面白い人だったわよね」とか言って。昔は自分の周りでも面白い人がいっぱいいたって言っていました、つくづく。

寺山さんのお芝居もやりましたしね。それから三島さんのお芝居も何本もやりましたが、やっぱり美輪さんにとつてみれば、寺山修司と三島由紀夫という出会いも大きかったんじゃないかと思うんですよ。僕もやっぱり三島由紀夫が楽屋に降りてくると、「今日の君の芝居はね、あそこの台詞がよくないよ」とかチェックされちゃって。僕も、ああだこうだと言いたかったけど言えないですよ。Tシャツ着てこんなムキムキマンの体でね。それで楽屋に呼ばれたときもね、「先生が呼んでいるから萩原君来い」って堂本正樹が呼びに来て。堂本正樹が先生っていうのは誰かと思ったら三島さんで。こんな偉そうな格好でね、「僕は君のおじいさんの詩はよく読んでいるんだよ」とか言われちゃって。「そうですか」なんて。私は全然読んでないですけどねってやろうかと思いましたが「ああそうですか」みたいな。何かいろいろなことをしや

べったんですがほとんど覚えていないんですけど、ムキムキマンの感じがすごかったって言うだけですね。

それで後年三島由紀夫の小説を、小説なんか読んだことなかったんです、それが後で読んだら、こいつ十六歳で『花ざかりの森』ですか。こんなのあり得ない、人間として。あんなもの十六で書いたら後は老後ですよ。あの人は十六歳から全部老後ね。あれじゃあ死にますね。よく書けるね、ああいうものを。嘘じゃないかと思ったもの。だって僕が三十代で読んだか忘れましたが、読めない漢字がいっぱいある。森茉莉さんの小説と同じですよ。わからない漢字ばかり出てくるんじゃないよって。それをさらさらと書けるわけでしょう。あれはすごい、あの表現はちよつとぞつとしますね。それで僕が授業でいつもやるんですけど、『雨のなかの噴水』という小説があるんですが、日比谷公園の噴水の描写を読みました？ 噴水の映画を見せるんですよ。で、その後に文章だと三島さんのこれがあるって。かなわないですよ。噴水を描写してくれて言われたときに、私はあの文章を書けないですよ。百年かかってても書けない。ものすごくうまいですよ。噴水ですよ、たかが。それが水がこう上がっていつて、こう力が解き放たれてふあーっていくっていう表現を、文章であんなにうまく書かれた日にはね、私悪いけれど文章書くのをやめまして言いたくなる。うまいんですよ。

基本的にはね、出会った人が全部文章がうまいっていう感じじゃないですか。そのシヨックたるや、ずうっと付きまとうんですよ。だって、大詩人はみんな酔っぱらいとっているわけでしょう。それがあんなすごい詩を、あの顔でこの詩をかけるかって。(笑) もうそれだけが不愉快なんです。大

きな声で、単に酒飲んで騒ぐだけの男ですよ。それがあんな文章を書けるって、僕の中ではあり得ないんです。

むしろ朔太郎なんて、僕は会ったこともないし、写真でしかないんだけど、あれは繊細を絵に描いたような感じだからわかるんですよ。この人がこれを書いてるなあって。それは地面の中で震えるかもわかりませんよっていう。でもほかの人は無理でしょう？ 言ったら悪いけど、草野心平ですよ。それがあの詩ですよ。わからないよね。三好達治だって女性の前ではあんなっていうさ、死んだ後に女性の着物を鴨居に掛けて泣いてた？ なんですかっていうさ。

真夏に真冬のことを、真夏に秋は来るわけじゃないですか、人生で青春のときに老人が来るわけよね。で、そのことがわからないんだよね、自分では。自分が青春時代のときって、自分が青春の真っ只中で老人だっただろうと思う、そのときの気持ちが変わらない。真夏で一番暑い十二、十三のときにはあつと秋を感じたんですよ、私も。一番暑い盛りにふつと秋を感じるんだよね。そのことがわからないよね。僕が今何をしゃべっているかというと、実は前橋文学館の二十周年のことを言っているんですよ。二十周年というのは最盛期じゃないかと思うんですけど、その最盛期にここが廃墟になるっていうことがイメージされてない。そこが一番問題。二十周年記念っていても、ここは廃墟になるんですよ、実は。四十周年記念、六十周年記念、わからないけど確実に廃墟になる。廃墟になったときどうするんですか？ という話です。二十周年記念で一番重要なイメージすべきは、青春のときに一番

重要なのは、青春真っ只中で老人を感じるのだと思うんですよ。だってさ、全部廃墟になっていますよ。たとえば四十年前、六十年前、百年前の建物で、残っているのを数えた方が早いと思うんですけども、前橋で百年前の建物はいくつぐらい残っていますか？ とすると、後八十年ですよ、ここね。

九州に八千代座っていう劇場があるんです、歌舞伎の。明治期に建てられた。あれね、全部建て替えなんです。そのまま綺麗に残して。中は鉄骨なんです。木造なので僕が行ったときには、もう朽ちていたんです。屋根も雨漏りさあざあ。ひどい状態。もう劇場としては使えません。そのときに青年会議所の連中が、一枚の瓦を自分たちで買おうという運動を起こして、何年もやって瓦だけそろえたんです。だけど楽屋は使えない、どろどろ。だけど明治期の重要な歌舞伎をやった劇場を壊すのは忍びないって立ち上がったのは全部若い連中です。で、これは無理だと。自分たちの財政では。それで市の方や周りは全部建て壊すっていう話になった。

温泉も取り壊してマンションにしちゃったんですよ、九州は。マンションになってる。ものすごい情緒のあった温泉が。それでそのマンション、廃墟ですよ、もう、ざまあみろって言ったんです、僕は。あれを建て直してマンションにしたなんてとんでもないですよ。それでその八千代座もぼろぼろだから建て直すっていう話なんです。壊しちゃおうって。

で、運動を起こして、それ僕の友達なんですけれど、そのときに起爆剤で何をやったかっていうと、玉三郎を呼びたいって、彼女は勝手に言って、八千代座の写真を玉三郎に、週刊誌の写真を貼って送ったんです。ここでやってくれと。玉三

郎って人はそういう人なんですよね。来たんです、その手紙を持って。面白いと。それでそこでやったんです。そうしたら、玉三郎が来るっていうのでうわーと客が集まっちゃった。玉三郎が来るっていうので楽屋を作り直した。あわててばらばらばらやって、一年に一回来たんです。毎年来ているんですよ。今でも来ているかは知りませんが。それでついに税金が下りて、全部建て直した。鉄骨にして、全部そのまま残して。今ではその周りの街並みも再興して。今なんて観光バスですよ。今はつまらないから行ってませんけれど。そういう意味では観光地化している。

それは、百年でしよ、百年なんてあつという間、後八十年ここにいる全員いません。私、四十周年でいません。だからあと二十年生きている今の若い方たちは、学芸員のあなたも生きているかもしれませんね、四十周年をやるんです。この学芸員は四十周年をやります。私たち観客は全員いません。そのときに何をやるんですか？　つていうね。六十周年も。そのときに取り壊しつていう話もあるかもしれない。もうすでに、三回目の時、六十周年のときに、取り壊すつていう話があるかもしれないですよ。そのときにどうする。一番重要なのは、建物は大了したことはないです。でも文学館は建物じゃあない。そこで何をやられたかつていうことですよ。その思い出がそこに残っているかつていう話ですよ。

映画館は自分が青春時代そこへ通ったから、映画館が壊れるときにみんな泣くわけです。そういう映画がありましたでしょう？　映画館がばあつて壊されるつていうときにさ、なんていう映画だったかな、イタリアの映画あつたじゃないですか。泣くよ、あのシーンは。アメリカにもありました。そ

ういうシーンは、ああ自分たちが子供のときからずうつと通ったあの映画館が無くなる、その思い出が無くなるんだつていうので泣くんですよ。だから映画館は取り壊したくない。劇場も取り壊したくない。共同の温泉もつておくところがあります。それから地方によつては銀行の建物もつておくところがありますね。そこをレストランに変えたりしてしまふすけど。そういう意味では思い出がそこに残っている、共有する思い出がそこに残っているつていうことをね、取り壊したくないつていう話で、建物の話ではない。

文学館というのは建物のことではない。そこで何が行われているか、そこでどういう思い出を共有するか、共有したかつて、その場所の問題なんです。そこが最も重要なことなので、だから取り壊したくないつてみんなが思うつてことはそこで出会つた言葉や、出会つた人や、出会つた話や、出会つた事柄つていうものの思い出をどうしても引きずっているつていうことです。でもそういう話になったとき、みんな壊そう、大賛成つていうんだと、それはここでの出来事が駄目だつていう話になつちゃうからね。つていうふうだね、今、後ろに立っている学芸員にプレッシャーをかけているんです。(笑) 怖いよね。

去年、ほぼ百年前の朔太郎が撮つた写真を前橋市内で撮つたじゃないですか。そのときに、残っているものはほとんどない。そのときに残っているのは、残つていて僕がびっくりしたのは、もちろん山なみとそれから日本庭園、あれがそのまま残っているつていうのにびっくりしたんですけれど。あそこは大了した公園ではないから残っているつて言っちゃったから、後で講演が終わつてから、野本(文幸)さんが理事長(波

宜亭倶楽部) になって保存にあたった、だからあの日本庭園は残っているって聞いて。とんでもない悪いこと言っちゃったなって思っ、すいませんって謝ったんです。つまりあそここの公園を、思い出の公園だから残そうっていう人たちがいたから残っている。だから僕が百年後に前橋であちらこちら写真撮っていたら残っていた。あそこが唯一残っていた。映画館なんて更地ですよ、今。映画館を残そうっていう話がゼロだったっていうことがよくわかる、これで。文学館だって第二の映画館になるっていうことはあり得る。

これ、イギリスだったらあり得ませんね、っていうふうに清水邦夫さんに言われました。清水邦夫さんは、「タンゴ・冬の終わりに」っていうお芝居をイギリスでやったんですけど、それは海辺の近くの映画館が壊されてスーパールになり、それは海辺の近くの映画館が壊されてスーパールになるっていう話なんです。それをイギリスで上演したら、イギリスではこんなのはあり得ない。リアリティーがない。映画館を壊してスーパールにするっていうそういう話自体リアリティーがない、あり得ないことだ。映画館を保存するのは当たり前だ、と。スーパールにするなんてあり得ない、って言われまして言いました。で、台本を書き替えてくれって言われたらしいですけども。そのぐらいですよ。だから百年継続して建物がそのままあるっていうことはイギリスでは当たり前前っていうことがよくわかると思いますよ。

ついでに、僕は野口(武久)さん、あ、野口さん詩集を出されましたね、今度ね、亡くなられてから。「朔太郎の写真」という詩がありました。野口さんっていうのは前橋市立図書館の館長だった方で、朔太郎研究会の事務局長をされていて、野口さんが保存されていた朔太郎の写真があったから今

回百年後のものが撮れたんですけれど、その中に朔太郎が撮った生家、朔太郎のお父さんの実家っていうのが大阪にあるんですけど、その写真と、実家の近くの道と、電車の駅とかあるんですよ。そこに行きました。前橋文学館からお話をいただいたので、それから全部撮りたいという気持ちになってしまいました。それで大阪の生家へ行きました。残っているんです、その生家が。しかも木造で。あの写真と同じものがあるんですよ。で、無人、誰も住んでません。だから取り壊しになるとまずいと思って、僕らが塀から覗いていた隣のお寺さんの住職さんが出てこられて、ここは萩原家のあれでなくて、よく知っていましたね。それで、もう当主は亡くなられていて、子供も、なにしろ萩原家はみんな医者ですから、孫もみんな医者です。それで萩原病院というところに電話したら、そこは撮影させてくれるという話で。まだ行っていないんですよ。その近くの路地っていうのもそのまま残っているんです。建て替えているんですけど、路地は同じような感じですね。だから百年変わらないっていうのはあるんですね。それで、JRの駅舎は全く変わっているんですが、線路の形は同じなんです。そこも写真を撮ってきて、ついでに朔太郎が旅行した、京都の南禅寺でしたつけ、南禅寺門っていうのを撮っているんですよ。それで京都も寄っちゃおうというので、その写真と同じところへ行こうと思って行きました。それで京都駅で、僕ら南禅寺なんてわからないから、タクシーに乗ってその朔太郎の写真を見せて「すみません、ここへ行ってください」って言ったら、「はい、わかりました」って。すぐですよ。何も言わずそのまま。この先の門ですからって言われて、へえーとかって言っ、写真を見ながら見てい

たら、寸分変わらない門がそこにありました。つまり京都で百年なんか、たいした問題ではない。何にも変わらない、寸分変わらない。何にも変わらないのに、変わったのは説明の板が増えていました、それだけです。だから百年なんて全然変わりございません。そんなもんですよ。ああそういうことかと思つてね、つくづく感動いたしました。

ただね、僕はこの前橋文学館が二十年つて聞いて、そのときにどういうふうに、今後思い出として、記憶する場所として変容していくのかなつていうのだけを言いたいために来ました。それで、文学館つていつても、日本全国の文学館つていうのはどんなのか、僕は四つか五つぐらいしか見ていないし、関わったのは寺山修司の記念館なんですけれど。結局文学館つていつても、例えば三島由紀夫文学館つてあるんですよ、山中湖のところに小さいところですよ。ものすごく狭いところなんです。で、本が置いてあつて、机が置いてあつて、ちよつと口ココ調の庭みたいなのがあるんですけど、そんなものなんです。それで、これじゃあないんじゃないかと思うんですよ。隣にどでかい徳富蘇峰の記念館があつて、三島由紀夫の何十倍のものが。さすが、死後はこういうところに現れるなつて思いましたけど。それはそれとして、やつぱりそのときに、言葉に出会つたためしがないです、文学館に行つて。

で、それが嫌だつていうので、文学館の案内(増補改訂版『全国文学館ガイド』全国文学館協議会編)に書かせていただいたんですけれど、要するに、鉄道博物館だったら鉄道に出会えるんです、レールとかもろに。動物園だったら動物に出会う。あらゆるものにそうやつて出会えるものがあるんです。文学

館なら文学に出会う。文学つていうことは言葉に出会う。いくつの言葉に出会つたかつて。文学館に行つて文豪が使った机なんて私全然見たくもないと思うんです。いやそれはそれでいいかもしれないよ、いいかもしれないんだけど、そのことに對して感動を覚えないんですよ。瀬戸内(寂聴)さんの文学館(徳島県立文学書道館)ていうのは、徳島でしたっけ、すごいでかい建物なんです。その三階だったかな、瀬戸内さんの部屋がそのまま置いてあるんです、再現して。でもね、一行も文章が書いていないんですよ。おかしいじゃないですか。おかしいじゃないかつて瀬戸内さんには怖くて言えなかつたんですが(笑) おかしいですよ、瀬戸内さんの文章に出会いたいのに。だけど机に出会つているんですよ、著作の本に出会つているんですよ。瀬戸内さんの文字に出会いたいんですよ。それが文学館ではないかつて。

それは確かにラフカディオ・ハーンの机を見ると、こんな高低差があつて、何故かという目が悪いからこうなんです。それは面白いかもしれないですよ、確かに。三島さんだつてきれいだつた、それは面白い。確かに面白い。寺山さんだつて変な机だつて、確かにそれはそうでしょう。だけど僕はやつぱりね、文字つていうか言葉に出会いたいですね。そうやつて文学館を出たときに、言葉をずうつと引きずつて。

それでね、建物に言葉があるじゃないですか。ギリシャだつてなんだつて。パルテノンの上に何ていう言葉でしたっけ? 「死を思え」だ。そういう建物の上に「死を思え」なんて書いてある建物を想像してください。そういうのつてショックだと思いませんか? 僕はあらゆる建物に全部文字が彫つてあるといいと思うのですが。自分の家に「山田」とかそんな

の書いたってしょうがないですよ。表札の上でかく、俺はこういう思いで生きていますよっていうさ。(笑)「死を思え」でもなんでもいいんですよ。ああ、この人「死を思え」って生きているんですかって。そうやって人の家を訪ねると言葉が、があーんて置いてある。「書物は何かだ」とか、ああそういうことですかって。「山田太郎」？ 知ったことではございません。そんなもの、名前なんて。だから文学館のあらゆる箇所に、廊下に、トイレに、扉に、全部言葉があつて、それぞれに、「扉は人生の何とかだ」とか、何か書けと。そうするとその言葉に出会ってそれを家に持ち帰る。そのことでふつと自分の家のトイレを開けたときに「ああ、トイレは何とかつてあったなあ」って思い出す。こういうことが重要なんじゃないかと。じゃないとね、一生その言葉に出会わないんですよ。

大学でも時々ありますね。家の近くに国士館大学っていうのがあるんですけど、図書館の上に大きなラテン語が書いてあるんですね。日本語で書いてくださいって言いたいんですけど。(笑) しょうがないから聞きに行ったらなんとかつていうラテン語なんですって。でも学生は一人も見えてません。だから日本語で書きなさいよと。日本語で大きくさ、なんで書かないのそんなこと、ラテン語で偉そうに。不満たらたらなんですけど。各大学に自分の校是を書きなさいよ、ちゃんと。そうするとこの大学はこういうふうに考えているのかとか思うじゃないですか。校是の代わりに個人の個是？ それぞれがその言葉によって生きているっていうのを掲げるっていうのだったらいと思うね。

文学館は言葉に出会う。僕はそのことだけを言いたい。だから言葉に出会って帰っていく。結局ボルヘスの何でしたっ

け、言葉っていうのはしゃべる方と受ける方が共通の過去を持つている、それが唯一のことなんだ。そうなんですよねって思いますね。ボルヘスは違う言葉で言っているのですが、私の理解は、それはそうだよ、言葉っていうのはしゃべっている人と聞いている人は同じ過去を持つていなければ通じない。それを思った瞬間、こうやってしゃべっているときに、ああこの人と私は同じ過去を持つていって思っただけで、何か共感しているかね、他人人んだけど、その人との距離がすごく近くなった気がするんですよ。共通の過去を持つているから納得する、共通の過去が無かったら知らんぷりしてますよ。どんなに一所懸命しゃべっても、何



言ってるの？ っていう感じでね、何も共感しない。そのことが唯一私にとつての救いだし、表現っていうのはそういうことです。表現は共通の過去は無いかもしれないけど、多分共通の思いや、何かしら共通の出来事があるんですよ。僕はそのことが言語にとつて一番重要なことだというふうに実は理解しているんですよ。

それで、国に、土地や家や建物に属していないんですよ、僕は。自分が属しているとすれば、日本の国語ですよ。国語に属している。明らかに。だから同じ日本の国語に属しているって思える人とは同じようにうまくコミュニケーション出来るかなって思っています。その一番の中心は言葉がいかに重要か、言葉に我々全部属しているっていうことを知らしめる役目を果たしているのが文学館じゃないかと思うんですよ。だからその意味では日本国憲法は言葉で書かれています。日本語で書かれています。もしかしたら日本国憲法によって全てが決まっているのだとすれば、そのことを違う側面から、日本語っていうか言葉を大事に思わせるっていうのが文学館の役目だよ。大変だよ、裁判所ってこだよ。（笑）国会ってこだよ、みたいなさ、そういう重要な役割を果たしているんだと思うんだよ。

本が読まれなくなっただけいいですけど、もう一回言葉の重要性を、だって私の心なんて言葉が無かったらゼロですもんね。言葉によって自分の気持ちを見えるんだもの。「悲しい」っていう言葉があるから悲しい。「悲しい」っていう言葉を知らなければ悲しくもならない。「悲しい」なんていう感情は、まるであたかも私たちは悲しさやなんとかっていう自分の中に感情があつて、それが当てはまる言葉を探してい

ると思うんですね。逆ですそんなもの。言葉があつてその言葉を発見して、「寂寥」っていう言葉を発見して自分の中の「寂寥」っていう感情を発見するんですよ。初めから感情なんかゼロですよ。言葉が無ければ感情なんかゼロです。そういう意味では、あたかも内面があると思つたら間違いです。そういうことを話せるっていうのが、文学館の役割だっているふうに強く思います。だから是非この二十周年記念のときに、四十周年、六十周年、八十周年、百周年記念を、私たち全員いませんけれど、上の方から（笑）見ていて、ああ、あそこでやっぱり最も豊かな前橋が、あの言葉の豊かな前橋が、本当の意味で文学館を中心とした、言葉の重要性をね、日本全国に発信する場所だったんだなあ、ということが、つくづくわかるっていう位置に是非ともしていただきたいというふうに思います。

何か早口でくだらないことをしゃべってしまいました、私の話はこれで終わりたいと思います。ありがとうございます。